

南三陸ツーリズム 大学と地域との連携

谷下 雅義¹・高峰 博保²

¹正会員 中央大学教授 理工学部都市環境学科（〒112-8551 東京都文京区春日一丁目13番地27号）
E-mail:tanishi@civil.chuo-u.ac.jp

²非会員 株式会社ぶなの森 代表取締役（〒928-0334 石川県鳳至郡能登町字当目60字41番地）
E-mail:takamine@bunanomori.com

大学は、ボランティア団体とは異なり、継続的にかかわることができる組織としての役割があるのではないかと。また学生という若者かつよそ者が活動を継続することで、地域の皆さんが、本来持っている地域の力を再認識し、被災地からだけでは見えてこない新たな発想も取込みながら、将来について主体的に考え実践する、そして地域で活躍する若者の定着を促進できる可能性があるのではないかと。同時に、学生にとっても「学ぶこと」の意味を再確認することができるのではないかと。

こうした問題意識のもと、私たちは、宮城県南三陸町をフィールドに「エコツーリズム」をテーマに地域と協働した実践的取組を行っている。本稿は、現在行っている森づくり、里を歩くプログラムづくりなどその概要について紹介する。

Key Words : the Great East Japan Earthquake, Eco-tourism, Minamisanriku town

1. はじめに

1,000年に一度ともいわれる巨大津波をともなった東日本大震災から約2年半が経過した。現在、被災地ではようやくがれき撤去が終わり、土木工事が進められているが、まだ住宅再建ができていない方も少なくない⁽¹⁾。大学は、ボランティア団体とは異なり、継続的にかかわることができる組織としての役割があるのではないかと。また学生という若者かつよそ者が活動を継続することで、地域の皆さんが、本来持っている地域の力を再認識し、被災地からだけでは見えてこない新たな発想も取込みながら、将来について主体的に考え実践する、そして地域で活躍する若者の定着を促進できる可能性があるのではないかと。同時に、学生にとっても「学ぶこと」の意味を再確認することができるのではないかと。

こうした問題意識のもと、私たちは、宮城県南三陸町をフィールドに「エコツーリズム」をテーマに地域と協働した実践的取組を行っている。本稿は、その概要について紹介するものである。

2. 被災前後の南三陸町の状況

南三陸町は、中世は産金、近世は養蚕、そして戦後は養殖などで栄えた。三陸の豊かな自然に支えられ、「ゆい」「もやい」「講」と呼ばれる労力やモノを、市場を介さず、相互に扶助する仕組みが残る。また津波などの自然災害への鎮魂の意味あいもある伝統的な踊りやお祭りも継承されてきている。食の美味しさ、ゆったりと流れる時間、風景や人の美しさに、都市的生活者は誰もが魅かれるであろう。

しかしながら、町の人口は、戦後、減少の一途をたどり（図-1）、いわゆる、人や土地の空洞化が進んでいた¹⁾。2008年に志津川町と歌津町が合併し、現在の南三陸町が誕生する。町は交流人口の増加をめざし、2006年から「南三陸ブランド塾」を開き、旧両町の地域資源を掘り起こす活動を行ってきた。3年間の活動を経て、海・里・山の一体的な取組みや地産地消、南三陸らしい商店街づくりなど産業分野で27項目、他に協働のまちづくりや環境保全など地域・住民へ6項目の提言を行った（南三陸町ブランド塾(2009)²⁾）。

その成果を具体的に展開しようとしていた矢先、東日本大震災が発生した。2013年2月28日現在、死者566名、行方不明者（届出数）は223名と、人口の約4.5%の方が犠牲となった。建築物の約62%、3,311戸が被災するとともに、町役場、防災庁舎、志津川病院

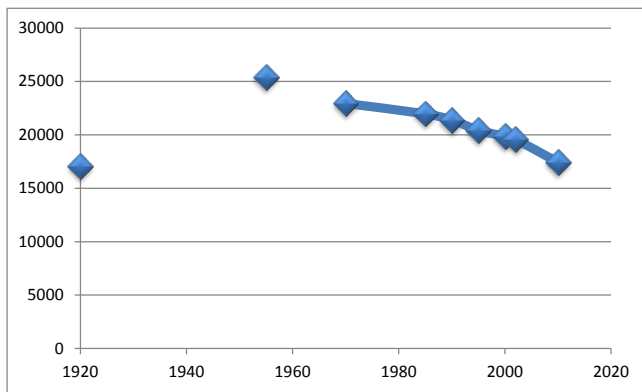


図-1 南三陸町の人口推移 (人)

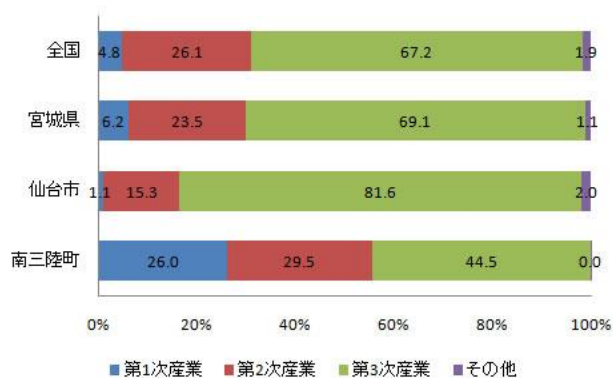


図-2 産業別人口比率(2005年)

サービスセンターなども被災し、一時的に行政サービスも大幅に低下した。

ホテル観洋またニュー泊崎荘など被災を免れた宿泊施設が、一時避難場所そして地域コミュニティの拠点、外部の人を呼び込む地域再生の拠点となって地域を支えてきた(毎日新聞 20130226³⁾)。

その後、仮設商店街がつくられ、多くの観光客が訪問しているが、商工業者については3割程度しか復旧できておらず(河北新報 201306⁴⁾)、また旧志津川町および旧歌津町での「最寄り品」の地元購買率は、それぞれ19.1%、12.5%にとどまるとの報告がある(宮城県(2013)⁵⁾)。

3. 南三陸ツーリズムのねらい

南三陸町に限らず、被災した地域の多くは一次産業が中心であった(図-2)。南三陸町では1985年の約4割から減少しているものの2005年でも約26%が第1次産業に従事している。三陸では、養殖漁業が盛んであり、製造業も水産加工が中心であった。一方、農業の評価や地位は低く、また従事者も少ない⁶⁾。今後、復興を促進するためには、漁業だけでなく、農林業の復興と付加価値化も重要な要素である。価値の高い一次産品は、製造

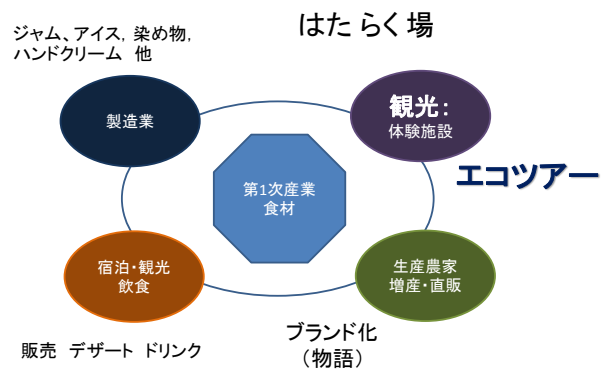


図-3 一次産品の高付加価値化

業やサービス業においても、より価値を高めた商品開発に寄与する(図-3)。この一次産品の付加価値化は、一次産業従事者や産業団体が推進するだけでなく、活用する側の二次産業、三次産業も参画することで、相乗的に価値を高めていくことが有効である。製造業は、素材を生産している人や現場を紹介し、お客様の理解と認識を高める努力をすることで自らの商品の価値を高めることが可能である。サービス業においても同じことが言える。一次産業従事者も自らの生産する産物がどこでどのように活かされているかを発信することを通じて、自らの価値を高める活動を行うべきである。

筆者らが着目したのは、サービス業の「観光(ツーリズム)」である。特に、自然や生活文化・産業・地域人など多岐にわたる素材を活かし、それらの資源が損なわれないことがないよう適切な管理に基づく保護・保全を図り、お客様が安心して参加でき、満足いただけるプログラムを提供する「エコツーリズム」の考え方を導入するのがよいと考えた。エコツアーでは、ガイド(インタープリター)の役割が重要であり、お客様の五感による体感や発見、気づきを最大限引き出すよう配慮し、地域の資源を保全・伝承しながら、地域経済に貢献することを目指している⁷⁾。

一次産業とサービス業は、ともに労働集約型であり、地域に雇用・仕事を生み出すことができる。従事者が増えれば、それだけ地域に循環するお金が増えることになる。労働に伴う付加価値が高いのはサービス業である。これまで一次産業とサービス業を同時に行う主体の育成は「グリーンツーリズム」で取り組まれてきているが、それが定着していないのは、その付加価値化、サービスとしての洗練が十分ではないことに原因の一端がある。

環境 FLP 谷下ゼミでは、高峰博保先輩(S53 中央大学法学部卒、株ぶなの森代表取締役、日本エコツーリズム協会理事)や町の皆さんのアドバイスのもと、森里川海の連環、津波とつきあってきた歴史文化、そして美味しい食や温かい人に学びながら「南三陸ツーリズム」と称して活動を行っている。本活動の特徴は以下の3点であ

る。

○東北と能登の被災地をつなぎ、新たな地域の可能性および活動を生み出す。

能登半島地震の後、能登地域では新たなツーリズムの必要性について議論され、具体化に向けての動きもいくつか生まれてきているが、ビジネスとして成立するにはまだまだの状況にある。南三陸町のような激しい被害を受けた地域の再生のためのアプローチとしてどのようなことを行っていくべきかを具体的に検討することは、人口減少下また地球規模での環境問題が大きくなっている状況において、今後の日本のあり方にも影響を及ぼす新たな挑戦である。ちなみに、ゼミでは能登でも活動を行っている。

○海と山をつなぐ

南三陸町は、震災前まではどちらかというと「海のプログラム」がメインであった。今回は、世界農業遺産にも認定されている能登での里山里海の取り組みをヒントにしつつ、南三陸町でも里山と里海を結び、自然災害からの復興の新たなあり方を検討する。

○大学の先輩との活動を通じて学ぶ

具体的なフィールドを対象に、中央大学 OB との交流を通じて、復興をマネジメントする考え方を学ぶ。先に被災した地域で取り組まれてきたことをヒントにしつつ、被災地域が連携して復興のための活動を積み上げたいと考えている。

4. 活動

地域外（今回は東京）の学生が参画することで、被災地からだけでは見えてこない新たな発想での取り組みを生み出すことを目指し、具体的には以下の活動を行っている⁸⁾¹⁰⁾。また写真-1~4に活動の様子を示す。

○「海のみえるやすらぎの森（仮称）」の散策コースの開発および体験プログラム（時間、季節、参加者の属性に応じた）の作成。

エコ／ヘルスツーリズムなど新たなツーリズムの可能性を探ることを通じて、短期的には、仮設住宅居住者の孤立化防止および健康増進、長期的には、一次産業を中心に営まれてきた被災地の暮らしに光をあて、地域にある資源を利用しながら、持続的に地域の振興を図る。

○「山の神平を歩く」ツアーの開発

南三陸町は、これまではどちらかというと「海のプログラム」がメインであった。今回は、世界農業遺産にも認定されている能登での里山里海の取り組みをヒントにしつつ、また産金から続く豊かな歴史文化そして南三陸に降った雨はすべて志津川湾に注ぐという特性を生かし、山の神平地区の暮らしに着目したプログラムの開発を行



写真-1 海のみえるやすらぎの森



写真-2 間伐体験



写真-3 山の神平を歩く



写真-4 里山里海の連環を学ぶ

っている。

○ブルーベリー活用計画の作成

私たちが貴重な資源として着目しているのが、かつて20世帯で栽培されていたというブルーベリーである。現在は4世帯となっているが、地域内循環を通じてブランド化を図れる可能性を秘めていると考えている。夏の収穫、秋の剪定、植え付けなどのお手伝いをしながら、体験、飲食などへの展開を支援していきたいと考えている。

またこの夏は、学生によるスタディエコツアーを開催する。そこでは海のみえるやすらぎの森を散策した際の唾液アミラーゼを指標としたストレス計測、また9月には日豪緑化事業を通じて、漁師の森の整備なども行う予定である。

5. おわりに

南三陸や能登のみならず、多くの過疎と呼ばれる地域では、人、土地、ムラの空洞化そして「誇り」の空洞化などが進む「課題先進地域」（小宮山（2007）^{12）}）である（小田切（2008）^{13）}）。

エコツーリズムのガイドが仕事として成立しうするためにはいかなることが必要か、エコツーリズムやヘルスツーリズムの発想も取り込みながら、机上の立論だけでなく、被災地における実験的な試みを通じて、学問としての深化を図りたいと考えている。土木計画学との関係において大きな論点の一つは「防潮堤」である。一次産業を生かし、製造・加工・販売そして観光へとつなげ、持続可能な地域をつくっていくために、いかなる「防潮堤」の構造が望ましいか、人命また財産を守るとはどういう意味なのか？エコツーリズムを通じて、検討を続けていきたいと考えている⁹⁾。

今後、全国で徐々に増えてきているエコツーリズムやヘルスツーリズムの事業体の現状を調査分析すると同時に、経営のあり方、事業構成のモデルを抽出し、被災地域に活かす方策を立案していきたいと考えている。

また、学生は地域の方をくりかえし訪問することで地域に親しみを感じ、また自然史ワークショップのサポートなど自発的に地元の皆さんと一緒に活動する機会が増加している。南三陸での活動が就職活動を考える契機になっている学生も少なくない。人的資源、人財育成という観点からも「南三陸ツーリズム」を評価したいと考えている。

注

(1)平成25年4月1日現在、仮設住宅にはまだ11万人の方が暮らしている¹⁴⁾。

(2)グリーンツーリズムやブルーツーリズムは、農業者や漁業者が、第1次産業での所得に加えて、観光（消費者との交流）を通じた追加的な所得向上を図る手段と位置付けられる。一方、エコツーリズムは、ガイド（インタープリター）が、自然や生活文化・産業・地域人など多岐にわたる素材を活かし、お客様が安心して参加でき、満足いただけるプログラムを提供するものであり、お客様の五感による体感や発見、気付きを最大限引き出すよう配慮する。ガイドとして地域で生計をたて、地域の資源を保全伝承、地域経済に貢献することをめざす。質の高いエコツーリズムは、都市生活者に「癒し」を提供するだけでなく、人口減少・高齢化が進む地域に、担い手としての若者を増やし、持続可能性を高めることにもつながる。

(3)佐野(2011)¹⁵⁾は、震災と観光について、次のように述べている。

「・・・（能登半島地震で大きな被害があった）黒島が良い例である。代々継承されてきたあの美しいまち並みが被災しているのを外部の人間が見たら、何とか元通りにしたい、と思うのが人情である。そのために、外部の専門家が国の文化財保護政策のレールに乗せる段階まで、黒島を支援したことは十分理解できる。ただ、外部の力はそこまでである。もっと本質的な部分、あの美しいまち並みの中で、どのように住民が生活し、これからの展望をどう描くのかは、結局のところ、住民自身が決めざるを得ないのである。今、黒島のまちづくりが停滞しているのは、限界集落だからではない。震災に遭遇してはじめて、住民がようやく重い腰を挙げたところ、急に事が進んでしまったために、「まちづくり」が住民を置いて一人歩きしてしまったのだ。・・・（中略）・・・震災の有無にかかわらず、日々のまちづくりの中で住民によって観光が真剣に議論されてこそ、観光はその役割を果たし得る。」

謝辞

本稿の作成にあたり、環境 FLP 谷下ゼミの学生また数多くの南三陸町の皆様より貴重な協力、コメントをいただいた。記して謝意を表します。

参考文献・URL（アクセス日は、いずれも2013年7月1日）

- 1)南三陸町(2008,2010)「南三陸町統計書」
- 2)南三陸町ブランド塾(2009)「ブランド化への提言」
- 3)毎日新聞（2013.02.26）
<http://mainichi.jp/opinion/news/20130226ddm012070070000c.html>
- 4)河北新報(2013.06.05)
http://www.kahoku.co.jp/spe/spe_sys1062/20130605_06.htm
- 5)宮城県(2013)
<http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/syokeisi/syokentyosa.html>
- 6)公益財団法人東北活性化研究センター(2012)「南三陸町にお

- ける震災復興・再生に向けた観光振興方策策定支援調査」
http://www.kasseiken.jp/pdf/project/subject/h23fy_minamisanriku.pdf
- 7) 公益財団法人東北活性化研究センター(2013)「東日本大震災からの復興の現状と課題に関する調査研究」東北活性研, 10-21 <http://www.kasseiken.jp/pdf/library/guide/vol.11.pdf>
- 8) 環境 FLP 谷下ゼミ(2012)南三陸活動報告
<https://skydrive.live.com/#cid=FB1C56C3D63DFEBB&id=FB1C56C3D63DFEBB%21182>
- 9) 南三陸ツーリズム(2012)
<http://bunanomori.com/minamisanriku/>
- 10) 中央大学(2012)「知の回廊」第 86 回「被災地域と共創するエコツーリズム」
http://www.chuo-u.ac.jp/chuo-u/kairou/kairou02-2012_j.html#2012_86
- 11) 総務省(2012)「城学連携地域づくり」実証研究事業
http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/gyousei/ikigakurenkei.html
- 12) 小宮山宏 (2007) 「課題先進国日本」中央公論新社
- 13) 小田切徳美 (2009) 「農山村再生：「限界集落」問題を越えて」岩波ブックレット
- 14) 復興庁(2013)
http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat1/sub-cat1-1/20130528_sanko05.pdf
- 15) 佐野浩祥(2011)「震災と観光」交流文化, 12, 4-13.

(2013.** 受付)

MINAMISANRIKU TOURISM: COLLABORATION WITH UNIVERSITY AND COMMUNITY

Masayoshi TANISHITA and Hiroyasu TAKAMINE

Unlike NGOs/NPOs, universities have a role of organizations which can be concerned continuously with a local organizations/people in recovery and revitalization from disasters. People who live in a stricken community, can take in the new way of thinking, have a new understanding of the power of the community and promote fixing of the young man/woman who plays an active part in the region with students who can act as young men/women and strangers. In addition, students can learn the real meaning of "learning".

Based on these awareness of the issues, we are taking the practical measure which collaborated Miyagi Minamisanriku town on the theme of "eco-tourism." This paper introduces the outlines, such as creation of reposecalmness woods with a ocean view, and a program which walks along *Yamanokamidaira* district.